グレープフルーツの詩

神崎琴音

満月を見てきれいだと言う、あなたのそのことだけに気持ちを揺すられる自分がいやです。お皿洗いはひまなひとがやれば苦痛ではないのかしらと思う。その日にわたしには羽が生えているはずだから、どうかそのまま連れ去ってください。愛したかったあなたにだけ詩情を割くのです。一緒に暮らすmとn。幾千通りの幸せのうちの、誰も通れない隙間を、わたしだけがすり抜ける。

覚悟なんて生まれたときから持つことが決まっていたようなものを。つめたい果汁に溺れる夜は、底に沈む。じっと待つ。ひかりはしあわせなひとの顔にしか当たらないと言う。代わりにわたしは懐中電灯をつける。

愛の詩

神崎琴音

愛は、愛と名のつくすべては、あからさまな愛は。愛が蝕んでいく身体も、視界も、意識も、すべてあなたのせい。目をそらすな、お前のせいだ。利発そうなふりなんてしていられないくらい、どうして必死になれないの、わたしは怒っている、あなたの柔らかな仮面、それ以外のあなたが見たかっただけ。

無限と琴線の詩

神崎琴音

恋することができるなら、きみは花びらと同じだけ価値があるよ。見たことないほど鋭利な星の美しさの、その真ん中に位置するのがきみの使命、そう告げることをためらわないほど、うつくしく偏った人間になりたかった。わたしの声は穏やかですか、当たり障りがないですか、この声で切実な音楽とことばを発することを、どうか、人間のいのちであるとみとめてくれやしないだろうか。存在は、影のある実存は、手の届くところにあると思っているうちが花だって、言われなくても知っている。